

2011年 5月15日・河北新報では

四万五千の人びとが消えた

40年前から原発に警鐘
南相馬の詩人・若松さん
作品・評論集を出版
「国全体で将来考えよう」

ちいさな手提げ袋をもって
なかには仔猫だけをだいた老婆も
入院加療中の病人も
千百台のバスに乗って
四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた
(中略)
原子力発電所中心半径三〇kmゾーンは危険地帯とされ
(中略)
東京電力福島原子力発電所を中心に据えると
双葉町 大熊町 富岡町
(中略)
小高町 いわき市北部
そして私の住む原町市がふくまれる
(中略)
人声のしない都市
人の歩いていない都市
四万五千の人びとがかくれんぼしている都市
(中略)
デパートもホテルも
文化会館も学校も
集合住宅も
崩れはじめている
すべてはほろびへと向かう
(「神隠しされた街」より)

福島第1原発から北に約25^{キロ}の南相馬市原町区で、40年前から原子力発電に警鐘を鳴らしてきた詩人若松丈太郎さん(75)の作品や評論を集めた『福島原発難民 南相馬市・一詩人の警告』(コールサック社)が5月上旬に出版された。原発事故による放射性物質に^{ほんろう}翻弄される今の南相馬を予言したかのような詩もあり、作品の一部は海外出版の話も進んでいる。

「肉を露出して連なる正面の崖を削り、海に向けて建てられた鉄とコンクリートのかたまりは、周囲の風景にそぐわない異質のものが^{ちんじゆう}闖入した感じがいなめない」。1971年、建設中の福島第1原発を見学した若松さんが河北新報に寄稿した「大熊一風土記七」の一節だ。

相馬地方の高校教師だった若松さんは76年の第1原発1号機の運転開始前から、原子力行政や東京電力の対応を疑問視する作品を発表。94年には原発事故があったチェルノブイリ(ウクライナ)を訪れ、原子炉を

覆う「石棺」を見学した。

「線量計のカウンターが振り切れたのを見て、原子力への不安や疑問が確信に変わった」と振り返る。帰国後すぐに書いた「連詩 かなしみの土地」の一編「神隠しされた街」は、放射能に汚染されたチェルノブイリと自らの暮らす地域を重ね合わせた内容だ。

若松さんは原発事故の影響で3月15日から福島市の親類宅に避難。1カ月後に戻った自宅は原発から20～30^{キロ}の屋内退避圏（当時）に含まれ、子どものいる近所の世帯は市外に避難していた。

放射能によって子どもの姿が消えたゴーストタウン。かつて詩で描いた光景が今、自分の周囲に現出した。「予測が的中したからといって喜べない。これは人災であり企業災。はらわたが煮えくり返る思いだ」と憤る。

若松さん宅は現在、場合によって屋内退避などが必要となる緊急時避難準備区域になっており、妻の響子さん（70）と放射線量を確認しながらの生活が続く。

若松さんは「事故を機に国全体で原発の将来を考えるべきだ。住民の一人として今後も原発に向き合う」と話している。「福島原発難民 南相馬市・一詩人の警告」は1428円（税別）。（加藤敦）

と紹介されています。